大学院博士前期課程応用言語学専攻における研究法授業の開発

佐々木　嘉則・菅生　早千江

要　旨

本学大学院・日本語教育コースは同列の学部を持たない独立大学院である。新入生はほとんどが学部時代に研究法の訓練を受けていないため、大学院入学後、集中的に研究法を訓練する機会が不可欠である。

本稿は、本大学において筆者が開設した研究法授業について、開設の経緯、授業の目的および授業の「コンテンツ」(シラバス)を報告する。「コンテンツ」の中心は、「研究に関する情報を収集・分析する能力」「研究を実施し、データを分析する能力」「研究結果を論文・口頭で発信する能力」さらに「自らの研究活動を俯瞰し、必要に応じて修正を加えるメタ認知能力」を訓練する課題である。最後に開設後 9 年間に受講者から寄せられた本授業の評価や提言を記述し、今後の課題を述べる。

【キーワード】情報収集、データ分析、論文執筆、プレゼンテーション、アカデミックリテラシー

1. はじめに

応用言語学は理論面では主として言語学および心理言語学、方法論としては主として心理学および教育学に範をとって発展してきた学問である。研究デザインをみても実験心理学や教育心理学と重なるところが多い。

本学大学院・日本語教育コースは、同列の専攻学部を持たず、入学してくる学生の多くは他大学の出身である。そのため、例えば日本の大学の心理学科では、学部の 2 年次に実験実習授業を課すことがほぼ全国的な基準となっている(心理学実験指導研究会 1985a, 1985b)が、本コースの新入生は、学部時代に認知科学や行動科学の研究法トレーニングを受けていない学生がほとんどである。したがって、研究法の指導は必須となる。

研究法は、芸事の世界で細かな約束事が師から弟子へ伝授されるように、各研究室において先輩から後輩へ伝えられることもある。しかし継続性という観点からみれば、共通化できる部分は授業科目という形で標準化された手ほどきをすることが望ましいことに異論はないだろう。

筆者が学んだ北米圏の応用言語学修士課程では 1980 年代から既に、博士課程(日本の博士後期課程にほぼ相当する)に進学を志望する、あるいは修士論文執筆を希望する学生は、研究方法トレーニングのための科目(Research Method)を受講するのが一般的であった。

このような背景を踏まえ、筆者は本務校に着任した 2001 年、日本語教育学を専攻する大学院生を主たる対象とした研究法実習授業を開設し、現在に至っている。以下、この科目の概要を紹介する。

2. 科目の概要

2.1 科目名および受講者

2001 年度と 2002 年度は「日本語教育特論」(春学期 2 単位)、「言語教育情報リタラシー」(秋学期 2 単位)という既設科目名で開講した。2003 年度からは授業の趣旨をより端的に表した科目名として、春学期の科目を「応用日本言語学研究法実習：基礎論」秋学期のものを「応用日本言語学研究法実習：本論」と改称した。2005 年度以降は、「応用日本言語学研究法実習」とし、春学期に開講している。

受講者は、原則として日本語教育コース(博士前期課程)の新入生(M1)を対象としている。過去には他コースの大学院生が履修した例もあった。科目等履修生や研究生も含め、受講者数は毎回平均 20 数名である。

2.2 「コンテンツ」(シラバス)の目的

通常、授業内容の記述は学習内容一覧を意味する「シラバス」の語を用いるが、本稿では課題や作業、活動の狙いも含めて記述していくため、「コンテンツ」の語を用いることとする。

本授業は研究遂行上必要な個別的スキルとして、以下の能力を養成することを目的としている。

Ⅰ 研究に関する情報を収集・分析する能力

Ⅱ 研究を実施し、データを分析する能力

Ⅲ 研究結果を論文・口頭などで発信する能力

Ⅳ 自らの研究活動を俯瞰し、必要に応じて修正を加えるメタ認知能力

である。

これらは、図1に示したように、研究のどの段階においても、相互に関連する能力であるといえる。

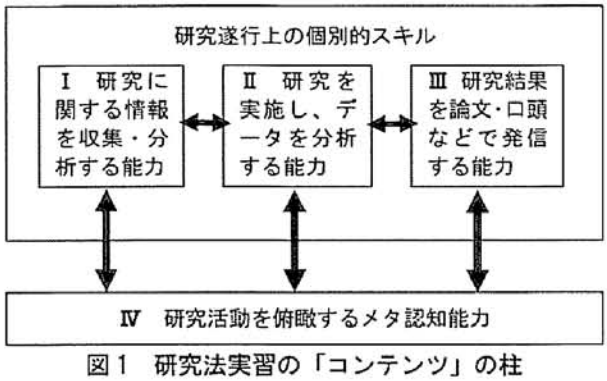


図1 研究法実習の「コンテンツ」の柱

次節で、これら4種類の能力のトレーニングとして、半期の授業の中で何を「コンテンツ」に盛り込んだのかを述べる。4種類の能力訓練の目的別「コンテンツ」の一覧は、稿末資料1を参照されたい。

2.3 「コンテンツ」の目的別の詳細

2.3.1 研究に関する情報を収集・分析する能力

Ⅰの「研究に関する情報を収集・分析する能力」を養成することを目的として、授業では、以下を講義や実習形態で行っている。

まず、1)大学院生としての図書館の使い方を知る、2)学術論文の体裁や書誌情報の記載方法を知る、3)文献データベースを用い研究文献を検索する、4)文献を管理ソフトで整理する、などを行う。これらの実践として、受講者は研究関心に従い50本の論文をリストにまとめる課題をこなす。さらに授業では、5)既発表の課題論文を分析する、6)自分が選択した複数の研究論文を対比させ、各論文の解説文を書く、ということも盛り込んだ。

5)の論文の分析課題は、米沢(2000)を指定し、次節で述べる「コンテンツ」の追試課題につなげている。表1には6)の研究対比課題における教示の概要を示す。

表1 先行研究対比表および解説文のまとめ方

- 『言語文化と日本語教育』増刊特集号の収録論文を参考に、任意の研究テーマに関して少なくとも5本の先行研究を、例えば被験者の母語、年齢、得られた知見などの点で対比した表を作成する(表に含める項目は各自の研究興味に応じて任意に設定してよい)。
  一個々の研究をそれぞれ別の表にまとめるのではなく、複数の研究を一つの表に整理し相互に比較できるようにする。

- 以下の雛形に則った解説文(1～2ページ程度)を添えること。この解説文は、短いといえども一本の論文として学術誌に掲載されることを想定して標題・文体・体裁などを整える。
  - ・分野の論題：「この分野の研究は、～という課題に答えることを目的にしている」
  - ・意義：「～という理由から、この分野は重要である」
  - ・方法論：「～の研究は～という研究方法を採用している」
  - ・主要学説：「この分野には、～という立場と～という立場とがある。両者の最も重要な違いは～である。しかし、両者はともに～という点で共通している」
  - ・研究の流れ：「～は～という方法によって～という結果を得たが、これには～という問題があった。そこで～は～するために…」
  - ・主な知見：「これまでの研究から、～ということが明らかになっていた」
  - ・未解決の論題・論点：「しかし、～という問題にはまだ答えが出ていない／意見が対立している」
  - ・今後の方向：「今後～の研究をさらに進めることが望まれる。(そのためには、～という方法をとることが効果的だと思われる)」

2.3.2 研究を実施しデータを分析する能力

Ⅱの「研究を実施しデータを分析する能力」を養成することを目的とし、先行研究の追試を行う。追試する米沢(2000)は、いくつかの利点を見出して選択したものである。同論文はリサーチクエスチョンが明示されているので、量的研究のモデルとして扱いやすい、推測統計学未習者でも、記述統計レベルの分析で結果が整理できる、対象領域(語用論)に詳しくなくても、常識の範囲内で何らかの解釈や考察ができる(より正確にいえば、できそうに見える)などである。

受講者は、米沢(2000)の質問紙を用いて新たな調査対象者から回答データを収集し、表計算ソフトに入力し、選択肢ごとの比率を求め、それをグラフに

示すという課題に取り組む。実証研究を実施することを、受講者は小規模ながら一から体験する。そして論文にまとめるという次の作業にもっていく。

2.3.3 研究結果を論文・口頭などで発信する能力

IIIの「研究結果を論文・口頭などで発信する能力」を訓練することを目的とし、同授業では大きくは 6 つの課題を与えている。1)論文執筆の原則を学ぶ、2)前節で述べた米沢(2000)の追試を、学術誌に投稿するという前提で論文にまとめる、3)任意の課題で発表するための原稿を執筆し、4)パワーポイントを用いた口頭発表を行う。そして次年度の受験希望者のための情報提供ホームページを開設するため、5)企画会議を会議方法にのっとって実践し、6)同ホームページを作成し、加えて各自が自分のホームページも作成する、である。

2)の米沢(2000)の追試をもとに論文を執筆する課題は、3〜4 人のグループで取り組む。この課題は、受講者に段落構造・図表の書き方も含め、定量的な研究報告論文の書式と文体を学び、論文の約束ごとを総括する機会を与えることを目的としたものである。提出前には表 2 のチェックリストに従って論文の体裁や内容について確認し、他グループから提出された論文と比較し、学術論文の要件について討議することなどを数回かけて行う。これは、何に注意して論文をまとめるのか、という観点を意識化させることを目的として、最終チェックをさせるものである。

3)および 4)の任意のテーマに基づいた口頭発表の課題では、受講者はアイデアをまとめる作業をマインドマップで行い、文書ソフトのアウトライン機能を使ってアイデアを階層化し、パラグラフライティングの原理に基づき原稿を書くことを求められる。さらには発表原稿をもとにパワーポイントを用いた口頭発表を行い、最後は一連の作業を振り返ってまとめとする。

5)の「次年度の受験希望者のための情報提供サイト」は、毎年 M1 が執筆責任者となり日本語教育コースのホームページに掲載されるものである。この課題でホームページを企画・開発することを求められるが、そこでは齋藤(2004)で提唱されている会議方法を実践し、短時間でアイデアを出してまとめるための実習も兼ねる。

6)の各自のホームページ開設は、本科目の学期末課題である。情報発信する起点をインターネット上に築くことを目的としている。その前提として、学期中には各自が研究者のホームページを検索し、情報量や視覚的な見やすさなどの観点から、研究者ホームページを評価・分析し、報告し合う。この作業を通して自分のホームページのイメージを作る。完成後は、日本語教育コースのホームページにある「現・元大学院生のホームページ集」に掲載される。

受講者は本節で上述したような課題を毎週こなしていく。また同時に、ここで述べた 3 つの能力すべてにかかわる「メタ認知能力」を高めることを目的とした課題も義務付けられている。

表 2　グループ執筆論文提出時のチェックリスト

- 指定記載事項
  - 投稿を想定する雑誌名を明記したか？
  - 各メンバーの担当箇所を明記したか？
  - 草稿にページ数を表示したか？
- 題目(『これから論文を書く若者のために』参照)
- キーワード
  - 論文内容を正しく反映しているか？
  - 読んでほしい読者層の興味を引くキーワードを選んだか？
  - 題目との重複を避けたか？
- 要旨
  - 何のために(研究課題)、何をして(方法)、どうなったか(結果)という情報を含んでいるか？
- 文体
  - パラグラフライティングにしたがっているか？
  - 各段落にトピックセンテンスがあるか？
  - トピックセンテンスはできるだけ各段落の冒頭においたか？
  - 一つの段落では一つの論点だけを主張しているか？
  - 不必要な否定修辞(「〜ではないかという仮説」など)を避けたか？
- 論理展開
  - 「先行研究」は研究課題を追求する必要性がわかるように書いてあるか？
  - 「後出しじゃんけん」(「結果」で述べなかったデータを「考察」の中で持ち出すなど)を避けているか？
- 投稿を想定する学術誌の標準的な書式にしたがっているか？(図表、参照文献など)
- 表記
  - アラビア数字は半角文字で統一されているか？

2.3.4 自らの研究活動を俯瞰し、必要に応じて修正を加えるメタ認知能力

IVの「メタ認知能力」は、ここでは研究者として自らの研究活動を俯瞰し、必要に応じて修正を加えることができる能力の意味で用いる。日常的なとこ

ろでは、毎回の授業の内容を振り返ることで理解を深化させることに始まり、大きいところでは、研究生活における達成目標とそこに至るステップを意識化させることなどが、この能力の訓練につながると捉えている。そこで1)受講者の掲示板を設け、毎回授業後に質問や感想をコースジャーナルとして投稿する、2)大学院を活用する方法を考える、3)自身の研究テーマを、学問的意義などテーマ選択の指針に照らす形で見直す、4)学会やメーリングリストを検索する、5)学会に積極的に参加することの利点を考える、6)研究にかかわる情報・アイデアを常に記録し蓄積を心がける、7)「ポートフォリオ」を継続的に書く、などについて講義し実践を奨励している。

1)のコースジャーナルは、ただの授業感想に終わらずに建設的な振り返りを求めるため、「～がわかりにくかった」「～が不足していた」「～がもっと知りたい」「次回の授業では～してほしい」などの表現を含めるよう指示が出される。

表3は3)「研究テーマを指針に照らして見直す課題」に使用する作業シートである。指針に照らすと、自分の研究計画は、1～5のうち何段階で評価できるか、またテーマ選択にあたって、それぞれの指針をどれほど重要なものとみなすのかを数値化する。研究テーマ選択にあたり何を重要と考えるのか、概念を数値に置き換えて考えてみる課題である。

7)の「ポートフォリオ」は、学位取得後の計画、学位論文のテーマおよび深く学びたい理論・対象・研究方法、先学期の振り返り及び来学期の目標、文献講読状況などをまとめた記録で、春学期と秋学期の開始時と終了時、合わせて年に4回提出を求められている。構成は次ページの表4を参照されたい。

2008年度からは、「ポートフォリオを通じて、数年間にわたる自分の大学院生活を振り返る」という趣旨のプレゼンテーションをティーチング・アシスタント(TA)が行っている。

2.4 「コンテンツ」間の連関

「コンテンツ」の概要は2.3で述べたとおりであるが、これらはそれぞれの課題に相互に連関を持たせている。IIの「研究を実施し、データを分析する能力」養成を目的とした米沢(2000)の追試実験と、これを投稿論文の規定を守った論文にまとめる実習との連関は、2.3.2および2.3.3で述べた。ほかにも、この論文執筆の実習のために、「学術論文執筆の原則」を授業で扱うが、それは任意のテーマでの口頭発表原稿を書く「パラグラフライティング」を実習する前提という位置づけも持たせている。さらに、文献データベースの実習で作成した各自の「読むべき文献50本のリスト」を、個人ホームページに掲載する、また実際どのように読み進めているのか、既読・未読の記録をポートフォリオで報告するなど、達成された課題を他のコンテンツで活用させている。

こうした連関のため、授業では課題達成の前提となる知識や必要なスキルの実習の提出順序に配慮している。詳細は稿末資料2を参照されたい。

表3　研究計画案の数量的評価のための作業シート

	a. 研究計画の評価 (1～5)	b. 各基準の重要性 (1～5)	c = a × b
興味			
学問的意義			
就職につながる			
研究の過程で多くを学べる			
学界での発表のチャンス			
実行可能			
どんな結果が出ても発表価値がある			
将来の研究の基礎になる			
素人にもわかる			
実用に役立つ			
総計			

表4　研究生活ポートフォリオの構成

記載項目			留意事項
ヘッダー	氏名・学年・修了予定年・正副指導教員名・通算在学期間・通算休学期間など		
全体目標	10／5／3／2／1／半年後の私の姿		(複数案可、以下同)15年後、20年後の構想も可とする。
	修士／博士論文のテーマ案		最初は「仮」の案でもかまわないので書こう。
	研究能力の習得目標	興味を持っている研究対象／分野(その理由)→そのためにしたこと・すること【達成期限を明記】	先に対象を決める場合もあるが、逆に理論や方法の要諸にしたがって対象を決めることもできる。
		深く学びたい理論／モデルなど(その理由)→そのためにしたこと・すること【達成期限を明記】	在学中に専門家の域に達したい目標分野を絞り込んで書く。
		身につけたい研究技法(その理由)→そのためにしたこと・すること【達成期限を明記】	研究対象や理論とどう関連するか、考えながら書こう。
	その他、在学中に習得／達成したいこと		研究と直接に関係がないことも可とする。
研究生活基本動作チェック	研究の基本原則・平素の研鑽・読む技能・書く／話す技能・情報の収集／整理・ネットワークづくり・情報発信など		結果の報告は任意とする。
各期の目標／実績	力を{入れる／入れた}こと		その期の重点目標／実績を書く。
	履修あるいは聴講{する／した}科目		ワークショップやカルチャーセンターの講座なども可とする。
	出席{する／した}学会・研究会等		「顔を出した」だけでも、努力の証として記録しよう。
	新たに開拓{する／した}情報網(人脈・電脈など)		メーリングリストや投稿ボードも立派な情報網であるので、忘れずに書こう。
	成果{目標・実績}(口頭発表、論文／レポートなど)		読みたい文献の書名を明記する、あるいは「～についてのレビュー論文を書きあげる」などとして後で達成度が容易に自己判定できるように書く。詳細は後段の「業績リスト」「文献リスト」に書く。
	その他の{目標／達成事項}		「資格をとった」、「～については自信をもって説明できるようになった」、「ソフトを使いこなせるようになった」なども立派な成果とみなして書こう。
	当初目標と実績のずれ・自覚症状等		懺悔に終わらせず、次期の飛躍の踏み台にしよう。
業績リスト			卒論なども忘れず書く。未発表の草稿もそのことを明記のうえ記載する。口頭発表は日付も忘れずに書く。長くなる場合、自分のサイトの該当ページのURLを記してもよい。
文献リスト			既読・再読中・初読中・未読・未入手の別を記入する。

2.5 授業運営の工夫

本授業は筆者の個人ホームページに専用のページを開設し、授業の目的、シラバス、参考文献、毎回の課題を掲載することにした。受講者にはそのページを予習としてあらかじめ閲覧してくることを伝えている。講義ノートのコピーもホームページに掲載し、授業中もスクリーンで提示するなどしている。授業担当者のホームページだけではなく、併せて受講者のメーリングリストを毎学期開設し、重要な課題の連絡や欠席者への対応に用いている。

本授業は初年度よりTAが補助している。近年では、前期課程在学中にこの研究法を受講した後期課程の院生がTAになることが多くなった。カリキュラム構成を知悉しているTAの存在は、グループ活動の指導助言などの上で力になる上、受講者にとって身近なモデルともなっているようである。

3. 振り返り

3.1 受講者からの提言

本授業については、受講者から大変有益であったとの評価を受ける一方で、2.3.4で述べた受講者の掲示板などに、批判や改善に関する意見も寄せられて

いる。本節では今後の改善の可能性を考えつつ、受講者からの批判を中心にまとめてみる。

3.1.1 追試実習に対するコメント

追試実習に関しては、多くのコメントが寄せられている。そのうちのひとつが、「追試実習が一回だけなのは少なすぎる」というものである。

しかし、90 分授業が 14～15 回という現行の時間割では、これ以上の時間配分は難しい。追試実習は当該論文の対象分野の学習というよりも、論文の書き方の作法(酒井 2006、戸田山 2002)を学ぶという色彩が濃い。各専門領域の個別の研究方法については、半期科目である制約から、それぞれのゼミに任せているというのが実状である。

「追試実習がグループの共同執筆だけで、学生が一人で執筆する機会がないのは不十分である」という意見もある。確かに、複数回の調査実習の機会があれば、二回目以降は個人で執筆する訓練は望ましい。しかし、半期の科目という制約の中で一度しか取り入れられない現状では、共同執筆の方がお互いの原稿をグループ内で点検しあうプロセスが含まれる分、学習効果が高いと判断している。このグループ作業については「授業時間外に話し合いの時間をとる必要があり、かえって時間がかかる」という負担も聞かれた。しかし、ここ数年は授業中にグループでの話し合いの時間を設けているため、この問題はある程度軽減されたと判断している。

「追試ではなく、学生がそれぞれ自分で研究計画をデザインしデータを集めるようにした方がいい」という指摘もあった。しかし、受講者全員が入学後 1～2 ヶ月の間に研究をデザインし、データを収集するのは至難のことである。さらにこの場合は、研究デザインなども指導する必要が生じるため、「論文執筆の決まりごと」に関する指導効果は減殺されることが懸念される。

「分析が記述統計にとどまり、推測統計学にもとづく有意差検定を含まないのは不十分である」という意見もあった。しかし本コースでは、初年次向けの統計学授業の開講は秋学期からである。M1 の一学期では必要な統計学の知識が学生に備わっておらず、実際問題として困難である。

「内容が定量的研究に偏っており、質的研究への導入が図られていないのは不十分である」については、時間数が限られていることと、筆者が質的研究の方法論について精通しているとはいえないことから、現在のような構成になっている。これを補うものとして、非常勤講師を招いて質的研究法(西條 2007, 2008)の入門授業を開講している。

以上、追試の課題については、意義は受け入れられているが、実施方法の見直しあるいは充実を望む声が多いということがわかった。しかし、半期科目であることなどさまざまな制約の中で実施するには、現在のあり方が妥当であろうと思われる。

3.1.2 ホームページ作成課題に対するコメント

各自のホームページ作成課題については、研究法授業において必須なものかを問う声があった。「自作のホームページを公開後更新している学生が少ないことを考えれば、この実習は不要に思われる」というものである。確かに日本語教育コースホームページ上の「現・元大学院生のホームページ集」を見ていくと、課題提出時のままのもの、リンク切れとなっているものも多い。

しかし、ホームページをたどってお互いの存在を知った先輩と後輩が連絡を取り合った例がある。また、今でも頻繁にブログを更新し情報発信している在学生・修了生がいることや、さらに院生のホームページに目を留めたある教育機関から、当人宛に就職の誘いが舞い込んだ事例のあることなどを考えると、ホームページ作成は学生の意識向上やキャリア開発に一定の役割を果たしているとはいえよう。

3.1.3 その他の課題に対するコメント

「大学院活用法」「学会活用法」などは、座学よりも同じ研究室の先輩から聞く機会を望む声もある。しかし、M1 の大半は他大学出身者のため、入学当初は先輩院生との人間関係もまだ確立していない。そのため、最初の学期に座学によるガイダンスを行うことで学習の機会を確保することにしている。

3.2 受講者の IT スキルの向上

開講後の 9 年間で大きく変化したのは、受講者の IT スキルである。2001 年度の受講者の大半はパワーポイントに触れたことがなかったが、2009 年度は全員が経験済みであり、授業であらためて使用法を説明する必要がなかった。また、ホームページ開発(ソフトウエアの紹介および実習)やエクセルによるデータ集計およびグラフ作成も、開設当初より短い時間で済ませることができるようになった。

IT 関係の実習に費やす授業時間が短くなったため、授業中に論文執筆のための共同作業をさせることができるようになり、この授業が「研究法実習」

としてあるべき姿に近づいているように思われる。

4. まとめと今後の課題

以上、研究法授業での開設以来の取り組みを報告した。ここで述べたものは応用言語学専攻の大学院前期課程において、実証研究を行っていく上でどのような能力を養成すべきか、そして半期で何を行うことで養成できるかを考え、開発した「コンテンツ」である。さらに改善の余地はあるかもしれないが、ある形を示すことはできたと考えている。

現在、大学教育では、学部生のアカデミックリテラシーを訓練する科目が注目されているが、大学院における科目は、アカデミックリテラシーの視点から検討されてこなかったように思われる。しかし、日本語教育コースのような独立大学院の例に限らず、近年社会人を受け入れる大学院が増加していることを考えると、M1を対象に研究法を訓練することは、学部におけるリテラシー教育と同様に重要な課題だと思われる。大学院における基礎科目開発の事例として、本稿が一石を投じることになれば幸いである。

最後に、本授業における今後の課題を述べる。本授業がどのように効果があったといえるのか、受講者の評価のみならず、何らかの測定を行うことで効果を示すならば、何を指標として効果を測るのかが問われる。ソフトウエアの使い方などの「技能」はその伸びを容易に確認することができるが、研究者としてのメタ認知などの複雑な認知過程の変化は定量化が難しい。こうした点を今後検討していきたい。

参照文献

小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996)「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『日本語学習者に対するプレースメントテストとしての SPOT(Simple Performance Oriented Test)：研究報告書(2)』, 筑波大学, 9-22.

西條剛央 (2007)『ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM ベーシック編)』新曜社

西條剛央 (2008)『ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM アドバンス編)』新曜社

齋藤孝 (2004)『会議革命』PHP出版

酒井聡 (2006)『これから論文を書く若者のために　大改訂増補版』共立出版

佐々木嘉則 (2004)「定量的研究の計画・成果をリサーチクエスチョンを軸として分析する一技法：森美子・黒沢学両氏の実験研究を事例として」『言語文化と日本語教育 2004年11月増刊特集号』69-87.

佐々木嘉則・高橋薫 (2008)「小論文執筆および口頭プレゼンテーション能力の熟達化を促すカリキュラムの開発」大学教育学会, 6月8日　目白大学『大学教育学会第30回発表要旨集』140-141.

心理学実験指導研究会 (1985a)『実験とテスト−心理学の基礎 (実習編)』培風館

心理学実験指導研究会 (1985b)『実験とテスト−心理学の基礎 (解説編)』培風館

戸田山和久 (2002)『論文の教室』日本放送出版協会

Buzan, Tony & Buzan, Barry (1993) *The mind map book*, London: BBC Books. (田中 孝顕 (訳) 2000『人生に奇跡を起こすノート術−マインド・マップ放射思考』きこ書房)

Findlay, B. (1996) *How to write a psychology laboratory report*, NY: Prentice Hall. (細江 達郎・細越 久美子 (訳) 1996『心理学 実験・研究レポートの書き方−学生のための初歩から卒論まで』北大路書房)

米沢久美子 (2000)「日本語における含意の解釈−母語話者と非母語話者との比較を通して−」『人間文化論叢』, 2, 183-191. お茶の水女子大学人間文化研究科

付記

本稿は、2009年12月4日のゼミで検討した佐々貴先生の草稿をもとに、菅生が補筆再構成したものです。菅生は2008年度に同授業のTAを務め、ゼミの当日は他のゼミ生とともに査読を引き受けたことから、第2筆者となりました。ご逝去の1ヶ月前に先生がこの論文を手がけたのは、研究法を訓練することの大切さを伝えておきたいという一心からのように思えてなりません。同授業を通して先生がどのように研究者を育てようとしたか、大学院生をはじめ多くの方に読んでいただきたいと願っております。

ささき　よしのり／お茶の水女子大学

すごう　さちえ／お茶の水女子大学大学院

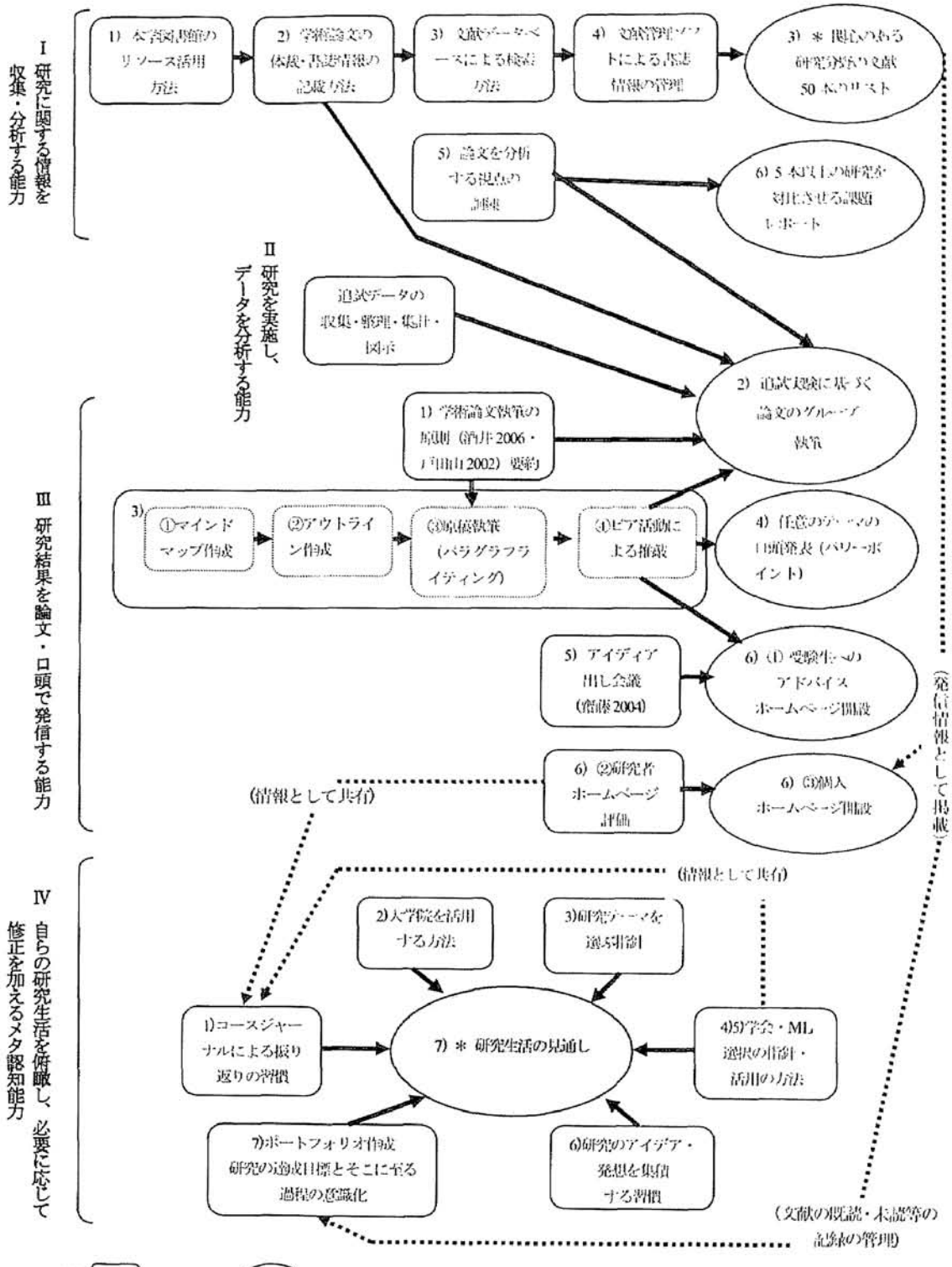
sachie_s2004@yahoo.co.jp

稿末資料 1　研究法授業の「コンテンツ」一覧

内容	作業／課題	課題の狙い
I　研究に関する情報を収集・分析する能力		
1)本学図書館のリソースの使い方を知る。	・「図書館オリエンテーリング」を経験し、書庫の利用やデータベース操作を試みる。 ・図書館主催の案内ツアー、図書館主催の文献データベース(EBSCO-Host など)の講習会に参加する(任意)。	・図書館の主要な施設と機能に慣れる。 (本学大学院日本語教育コースへの進学者の多くは他大学の卒業生であるので、早期に本学図書館に慣れさせる必要がある)
2)学術論文の体裁・書誌情報の記載方法を知る。	(講義)	・学術論文の体裁を知り、また書誌情報の記載方法に慣れることで、文献検索や管理を効率よく行えるようにする。
3)文献データベースを用い研究文献の書誌情報を検索する。	・任意のテーマに関し、50 本以上の文献を優先度・重要度順に並べたリストを作成する。 ・今後半年～1 年のうちに読了することを念頭において作業する。	・様々な文献情報収集方法に習熟する。 ・専攻分野の主要文献を知る。 ・文献の重要度を最初に判断(推測)する直感を養う。 ・文献講読を進める順序を定める指針とする。
4)書誌情報を Get-a-Ref などの管理ソフトに整理する。	(講義：情報管理の必要性の説明とソフトの紹介)	・文献の収集や管理を効率よく行えるようにする。
5)既発表の論文を分析する。	・指定の論文(米沢 2000)を、背景・研究課題・方法・結果という枠組み(佐々木 2004)に従って整理分析する。	・論文の分析方法に慣れる。 ・追試研究の準備として、先行研究論文の論理展開を深く理解する。
6)先行研究を対比し、そこから結果の一般化や未解決課題の抽出を図る。	・任意の既発表の論文 5 本(ただし同一分野類似アプローチのもの)を一枚の表に対比整理し、そこから言えることを解説した小論文を書く(表 1)。(学期末課題)	・研究論文の比較対照の方法に習熟する。 ・先行研究の主要論点と未解決の論題を知る。 ・修論の「先行研究のまとめ」への橋頭堡を築く。
II　研究を実施し、データを分析する能力		
先行研究の追試を行い、データを整理・集計・図示する。	・米沢(2000)の質問紙を用いて新たな調査対象者から回答を収集し、エクセルに入力し選択肢ごとの比率を求め、グラフに示す。	・表計算ソフトを使った数値データ集計とグラフ化の基本に慣れる。
III　研究結果を論文・口頭などで発信する能力		
1)学術論文執筆の原則を学ぶ。	・戸田山(2002)および酒井(2006)を要約する。	・学術論文の基本的な約束ごとを知る。
2)実施した追試をグループで投稿論文にまとめ、互いに評価する。	①上述のデータをもとに、学術誌に投稿する想定で論文を執筆する。(小グループごと)	・章節構成・段落構造・図表など、定量的研究報告論文の書式と文体を学ぶ。
	②所定のチェックリスト(表 2)に従い、自グループの作品を最終確認のうえ提出する。	・論文作成にあたっての重要事項を意識化させる。
	③各グループの提出論文を評価し、章・節ごとに「最も優れている論文」を選ぶ。	・他グループの作品を精読させる。
	④上述の評価を踏まえつつ、学術論文の要件について授業中に討議する。	・具体例を踏まえ、論文の作法を総括する。
3)任意のテーマに関し発表原稿を執筆する。(アカデミックライティングのカリキュラム開発については佐々木・高橋 (2008)を参照のこと)	①任意のテーマに関して思いつくアイデアをマインドマップ(Buzan & Buzan 1993)上に書き出す。マインドマップのアイデアから 3 つのループを構成する。	・アイデアの連関関係を視覚的に表示する技法を習得する。 ・所定の時間内でまとまるよう話題を絞る。
	②ワードのアウトライン機能を活用し、上述のアイデアを階層化する。	・文章構造を意識化する。
	③上述のアウトラインをもとに、各段落(本稿では「パラグラフ」と同義)のトピックセンテンスを選び出す。段落を完成させる。	・パラグラフライティングの原理を理解する。 ・パラグラフライティングにもとづくライティング方法に習熟する。
	④ピア活動によるやりとりを通じて原稿を推敲する。	・ピア活動に慣れる。

内容	作業／課題	課題の狙い
4)任意のテーマに関し、プレゼンテーションソフトを用い口頭発表を行う。	①上記の発表原稿をもとに、パワーポイントファイルを作成する。	・代表的なプレゼンテーションソフトに慣れる。
	②一人3分の発表会を実施し、司会・機材設定・プログラム準備なども受講者が行う。	・学会発表・運営を擬似体験する。
	③発表会後、「マインドマップ」「アウトライン文書」「発表原稿」「パワーポイントの配布資料フォーム」を提出する。	・アイデア出しからプレゼンソフト完成までの一連の流れを一望に収めて振り返る。
5)アイデア出しのための会議方法を実践する。	・齋藤(2004)の会議方法を実践し、小グループで「次年度の受験希望者のための情報提供ホームページ」の構成とコンテンツの企画案を立案させる。	・短時間でアイデアを出し切るスキルを学ぶ。
6)インターネットでの情報発信能力をつける。	①受講者が共同で、「次年度の受験希望者のための情報提供ホームページ」を開設する。(学期末課題)	・後輩へのガイダンス作成を通じて、自分達の大学院受験経験を振り返る。 ・ホームページの共同企画・開発を経験する。
	②研究者のホームページを検索し、気に入ったホームページのURLと、優れた点および改善を望みたい点を報告させる。	・ホームページ評価の視点を意識化させる。 ・自分のホームページのイメージを固める。
	③各自がホームページを開設する。修了後も更新できるよう、学外のプロバイダーを使用させ、日本語教育コースのホームページにリンクする。(学期末課題)	・ホームページの基本的な仕組みを理解する。 ・ホームページ開発ツールやアップロードの方法に習熟する。 ・専門家として情報発信する起点をネット上に築く。
Ⅳ　自らの研究活動を俯瞰し、必要に応じて修正を加えるメタ認知能力		
1)コースジャーナルを書く。	・授業に関する質問や感想などを掲示板に投稿する。 ・学会などの有益な情報を受講者で共有する。	・授業内容の振り返りを習慣にする。 ・意見交換による理解の深化を図る。 ・不明確事項の抽出と再確認を行う。 ・研究関連の情報の収集や提供に努める。
2)大学院を活用する法を考える。	(講義)	・2年間(4学期)での演習や集中講義、勉強会や研究会の履修・出席について考える。
3)研究テーマを選ぶ指針を考える。	・実用性、理論的意義などの観点から各自の研究テーマを自己採点させる(表3)。	・大学院入学時の研究計画書をメタ的に見直す。
4)学会・研究会メーリングリスト(ML)を選ぶ指針を考える。	・推薦する学会・研究会・MLの名称と推薦理由および概要などを報告させる。	・インターネット上の学界情報を探索する。 ・当該分野に関係した学会の特色を知る。 ・得られた情報を交換し有効活用する。
5)学会を積極的に活用する。	(講義)	・研究関心が近い発表者とネットワークを築くなど、学会に参加する様々な意義を知る。
6)様々な研究のアイデアを発想・集積する。	・メモ帳(「研究のネタ帳」)を常時携帯させ、アイデアや疑問を記録させる。	・研究のアイデアを継続的に記録することの効果を認識する。
7)研究生活の見通しを立て、研究生活上の達成目標とそこに至るステップを意識化する。	・「ポートフォリオ」を紹介する(表4)。 (講義:ポートフォリオをもとにTAが経験を語る) ・将来計画、深く学びたい理論・対象・研究方法、先学期の振り返りと来学期の目標、文献講読の進捗状況、業績一覧などを「ポートフォリオ」に記入し提出させる。	・長期的ゴールを見通した上での日々の研究／勉学計画を立案する。 ・自分の進捗状況を自分で把握し、自律的に研究を進められるようにする。
※その他		
SPOT(小林・フォード丹羽・山元 1996)を体験する。	・受験者の立場でSPOT問題を解かせる。	・非母語話者の研究対象者の日本語能力を簡便に測定するツールを知る。

稿末資料２　研究法授業の「コンテンツ」間の連関関係



※ □は授業内容、○は達成課題を示す。→は課題達成の前提となる知識や必要なスキルの習得を意図した提出順序を示す。 ⋯▸ は達成した課題を他の「コンテンツ」で活用することを示す。
図中の番号は前出の「コンテンツ一覧」のものと対応している。＊は、前出の一覧表ではその番号のコンテンツの下位課題として示されている。

Developing a Curriculum of Research Methodology for the Class of Graduate School Students Belonging to the Early Doctorate Term of Applied Linguistics

SASAKI, Yoshinori・SUGO, Sachie

Abstract

The Department of Applied Japanese Linguistics of Ochanommizu University's Graduate School is an independent department with no undergraduate department pursuing the same major. Therefore, the students need to be trained intensively in the matter after entering the graduate school.

This article reports about a curriculum of research methodology developed by the first author for these students. It includes its background, its purpose, and its "contents" standing for the syllabus of the class. The "contents" have been elaborated mainly to enhance the students' ability in the following four points; the ability to collect and analyze the information related to their research, the ability to carry out a research project and analyze the collected data, the ability to report the result of the research by contributing written articles or making oral presentations, and the meta-cognitive ability to overview their own research activities and make adjustments if need be. This article concludes by referring to the implications and the points which may need further consideration.

【Keywords】 collecting information, analyzing data, writing articles, making presentations, academic literacy

(SASAKI: Ochanomizu University)
(SUGO: Graduate School of Ochanomizu University)